

## 沈黙

林玉堂〔林語堂〕先生は、フランスのある演説家がひとに緘黙を勧めておきながら、三十巻もの本を書いて、物笑いになったとおっしゃる。だからわたしはいま沈黙についての文章を書くのだが、極力節約に努め、原稿用紙三枚を限度とする。

沈黙の提唱は宗教面から言えば、たぶん材料はとても多い。神秘主義では沈黙をととても重く見る。メーテルリンクに一篇絶妙の文章がある。しかしわたしはそういう風に書こうとは思わない。宗教を擁護する嫌疑がかかるのを恐れるばかりでなく、実際そんな知識も才力もないからである。今はただ世故人情に着眼して述べてみよう。

沈黙の長所は第一に力の節約である。中国人は、話が多いと気を損ない、書き物が多いと神を傷なうと言う。話をせずものを書かないのがたぶん長生きの基なのだろうが、ふつうの人間にはなかなかできないことである。それでは一時の沈黙でもよいとしたら、われわれには大いに裨益になる。三十時間に一篇の大文を書き上げるとすれば、睡眠の時間さえなく、三日目には必ず頭痛がする。演説家が演壇で二時間も呼号すれば、口が乾き喉が痛くなってしまう。ともにやる甲斐もないこと甚だしい。沈黙するなら、そんなご苦労はしなくて済む。——もつとも名声は得られないけれども。

沈黙の第二の長所は手間が省けることである。古人は言った、「口は禍の門」と。門を閉じ、封をすれば、禍は発生しようがない。（“門を閉じて家に坐っていても、禍は天から降ってくる”。それは“空気伝染”ということであって、話は又別である。）これは利の一である。自分で人を説得しようとしたり、あるいは何か弁解しようとしても、例によって何の影響もなく、しかも言えば言うほどいよいよ掴み所がなくなり、早いうちに沈黙するには及ばない。そのために説得あるいは弁明はできなくなるけれども、少なくとも誤解を増やすことはない。又あるいは他人が縷々述べる場所があっても、そんな場合も例によってあまりよく理解できず、なかなか容易には答えられない。そんな時沈黙は適当な方法の一つである。古人は物言わぬは最大の理解といったが、この言葉には深奥な道理があるのかもしれない。わたしの考えでは、わたしにとって少なくとも理解しないということを隠しておける、そして相手の方でも理解されたと勘違いする自由を持つことができる。沈黙の長所の長所は、これがその二である。

善良な読者諸君よ、わたしのことをあまりにも玩世的(Cynical)だと思わないでほしい。実を言うと、わたしは人間の相互理解は至難と思う。——たとい不可能な事ではないにしても、自分の真実の感情や思想を表現するのもやはり同様に難しいと思う。われわれは話をし文を書き、他人の話を聞き、他人の文を読み、互いに理解できたと考える。これはいささか自ら楽しみ意のままになる好い夢であって、自分で醒めたと分かった時でもまだすぐには認めようとせず、夢だと知ってもまだ夢の境地に一刻でも長く居続けようと思う。しかしわれわれがそのように話をし文を書くのもすべてただそうしたい、そのようにいささか楽しみたいと思うからに過ぎず、もしそれが何の楽しめるものもないと思うなら、できるだけあっさり止めてしまう。門外の芝生の上で何度かトンボを切り、向かいの高楼の上の美人が見ていると想像するのは、（明らかに

彼女が見ているとは限らないと分かっている）とても愉快である、というのは一つの方法である。どうせ彼女が見るはずもないなら、トンボは切らずに、芝生に寝転んで雲でも見よう、というのも一つの方法である。両者はどちらも正しい。わたしが今回やるのは二番目のプログラムなのだ。

わたしはトンボを切るのが好きな人間である。自分でうまく切れないことは知っているけれども。だがこれもただ巧みでないというだけであって何か害があって、世道人心の心配になるほどではない。だが自分の評語はどうしてもあまり当てにはならないから、多くの知識階級の道学者から見れば、わたしのトンボ返りはみな切り方がいささか不道德なので、その姿勢が風俗を壊乱するほどではないならば、その主旨は治安妨害に近い、ということになる。こうした情況は中国では意表の内の事だと言え、われわれも決してそのために態度を変えようとは思わないが、民間でのこうした傾向がある一定の程度に達するなら、トンボを切る人間は少なくとも力を節約することを考える時になったのである。

三枚の原稿用紙はそろそろ一杯になろうとしている。この文は終わるべきである。わたしは三枚の原稿用紙を使って沈黙を提唱した。これが現在の中国に適当な方法だからである。——しかしながらこれはもともと二つの方法の一にすぎず、時にはもう一つの方法、嬉しい時には少々トリックを弄し、“金を借りて憂さ晴らし”を選択することもできる。いつか他所で何かの機縁があれば、また騒ぐかもしれない。

一九二四年七月二十日。

※初出：1924年7月23日『晨报副刊』

---

\* 次の附記は『晨报副刊』に掲載されたもので、文集には入れていない。

#### 附記

わたしは以前多くの別号を用い、読者にご質問の労をおかけし、常に不安を覚えていた。今特に総括して声明する。仲密・子巖・式芬・槐寿・荊生・陶然・開明は、皆わたしが用いた別号である。開明以外は、以後すべて廃止するつもりである。“朴念仁”〔『晨报副刊』でこの文章の署名に使った〕もそのうちに入る。一九二四年七月二十日、入伏の日なり。